

『和田合戦女舞鶴』より 市若初陣の段

2018年より精力的に大曲丸一段の演奏に挑んできた豊竹呂太夫、鶴澤清介。この演奏会の目的は、一組の太夫・三味線で丸一段を語り通すことで、作品本来の魅力を再発見することにあります。

2023年は満を持して「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」に挑みます。

「和田合戦女舞鶴」は、呂太夫の祖父、十代目豊竹若太夫による名演以来、六十年近く顧みられることの少ない名作です。上演回数が少ない作品を披露することは伝承芸能に関わる者にとっては責務でもあり、観客にとっては稀曲の鑑賞に巡り合う好機でもあります。

毎回恒例となりました早稲田大学教授の児玉竜一による演奏前の作品解説、また、演奏後の座談会、公演パンフレットも含めて、上演作品の世界および演者と演奏を、より深く感じてもらえるよう工夫してお届けします。

解説

児玉竜一

早稲田大学文学部教授



「和田合戦女舞鶴」は錯綜する男性社会の政争の中で、残酷な行為に追い詰められてゆく女性の姿を描く、新たな視点と視角からの再評価を待つ異色作です。

我が子を切腹に追い込むという残酷な政治劇ですが、和田合戦をめぐる血なまぐさい背景は、昨年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の好評からも、関心の高まりがうかがえます。また、女性を悲惨な立場に追い込む戯曲構成と、それを表現する豊竹座独自の曲風を体現しているという点でも、多角的な再評価に耐える作品と考えられます。文楽本興行では1989年以来上演を見ておらず、その後は呂太夫が素浄瑠璃で勤めてきました。

出演者について



豊竹呂太夫

Toyotake Rodayu



豊竹呂太夫は、昨年、太夫の最高位である「切語り」に昇格し、来年には十一世豊竹若太夫を襲名することが決定しています。体力のある内に、祖父十代目豊竹若太夫も得意とした大曲に、いわば決定版として挑みたいとの念願を叶えることは、大きな意義のあることと思われれます。八代目綱太夫・四代目越路太夫・三代目春子太夫ら、異なる系統の太夫から稽古を受けたという点でも、呂太夫の芸歴は今日の文楽界にあつて貴重な存在であり、演奏後に芸談の席を設けることで、そうした貴重な芸歴の一端を聴衆に披露できるように図っています。呂太夫の軽妙洒脱な話術は、巧まらずして文楽の厳しい稽古と、その蘊奥を一般観客に伝える役割を担っているものと思われれます。



鶴澤清介

Tsurusawa Seisuke



三味線の鶴澤清介は、剛柔兼ね備え、古典から新作まで幅広い芸域で作品の魅力を造形してきました。当代呂太夫の「市若初陣」は、これまで鶴澤清友の三味線によつて演奏されてきましたが、本興行で呂太夫が語る機会を得た場合に弾くことになるであろう清介に、演奏の機会を設けることは、伝承の点からも貴重で、重要な契機となります。清介の精妙にして洒脱、どこまでも続くかと思わせる話術も聞き物で、文楽三味線の魅力を語る稀有な語り部としての魅力も堪能できる機会となるでしょう。